

□海外文献紹介□

**便潜血反応スクリーニングによる
大腸癌死亡率の減少**

Reducing mortality from colorectal cancer by screening for fecal occult blood: *Mandel JS, et al* (N Engl J Med 328: 1365-1371, 1993)

1972年から1977年の期間に登録された46,551人の50～80歳の男女を対象に、毎年便潜血反応を検査する群、2年ごとに検査する群、対照群の3群に無作為に分けて、便潜血反応検査が大腸癌死亡率の減少に有益かを調査した。潜血反応はグアヤック法を利用したHemocultスライドを利用して、連続3回の便を採取して検査し、1982年以降の検査ではスライドは加湿した後に、検査した。6枚のスライドの中で1回でも便潜血陽性の者には大腸内視鏡を含めた診断および必要な治療を行った。

調査期間中に配布したスライドの回収率は毎年群75.2%、隔年群78.4%

であった。全登録者の生死を調査し、99%で死因を確認できた。13年間の経過観察中、1,002人の大腸癌が診断された。10,097人の死亡例中に、320人の大腸癌による死亡があった。大腸癌の累積発生率は3群間で差はなかったが、大腸癌による累積年間死亡率は毎年検査群で1,000人当たり5.88人と最も低く、次いで隔年検査群で8.33人、対象群で8.83人であった。すなわち対照群と比較して、毎年検査群では大腸癌による死亡率が33%減少し、統計学的有意差を認めた。しかし、隔年検査群では6%の減少にとどまり、有意差は認められなかった。発見後の生存率は毎年検査発見群で最も高く、次いで隔年検査発見群、対照群の順で、潜血反応で発見できなかった群のそれは対照群と同じであった。Duke's分類Dの大腸癌は、毎年検査群の33人に対して対照群では65人を占め、より早期での癌発

見が死亡率の低下をもたらしていると考えられる。

Hemocultスライドの検査前加湿により陽性率は4倍に上昇した。大腸癌に対する感受性は上昇したが(80.8→92.2)、特異性は低下した(97.7→90.4)。これは偽陽性例が多くなり、明らかにcost benefitに影響するが、その結果もたらされた大腸内視鏡施行例の増加は早期の非出血性大腸癌を偶然検出する機会を増やした可能性がある。毎年検査群で大腸癌による死亡率は33%減少したが、全登録者が完全に検体を提出していれば、死亡率はもっと低下したであろう。

【訳者コメント】 便潜血による大腸癌スクリーニングの有用性を明らかにした、ミネソタグループからの最も大規模な研究成果である。

(関東通信病院消化器内科

白井 一裕 抄)